

は じ め に

岡 道男先生には本年 3月31日、京都大学文学部を定年によりご退官になる。先生は昭和44年 4月に同志社大学より京都大学に移られて以来、松平千秋名誉教授とともに、そして54年 4月以降は主任教授として、西洋古典語学西洋古典文学講座を担当して来られた。

先生は京都大学において松平千秋先生の、チュービンゲン・マインツ両大学においてはヴォルフガング・シャーデヴァルト教授とヴァルター・マルク教授の薫陶を受けられ、西洋古典学の精神を深く体得し、いまだ歴史の浅い我が国のこの学問に高い理想を掲げ、かつそれを体現して来られた。すなわち、全人格的表出を理想としたギリシア人・ローマ人の文化遺産に相對して、後世の学徒はともすれば哲学・史学・文学に分かれて研究を行いがちであるが、先生は一身をもってギリシア・ローマの全体に立ち向かおうとされる。そのことは、先生のこれまでの教育研究の対象がホメロス以下の文学は固より、プラトン・アリストテレスの哲学、トゥキディデスやリウィウスの歴史をも含んでいることから容易に窺える。主要な関心は自ずから文学に帰するが、その際、先生が常に重視されるのは、文学における伝統的要素と作者の創意との関わりの問題である。その結果、研究はギリシアに先立つオリエントの神話・文学にも及び、ギリシア・ラテン文学が常に一体のものとして扱えられるのである。まことに、先生が公にして来られた学術論文及び翻訳は、神話、ホメロス、ヘシオドス、ギリシア悲劇、アポロニオス、ローマ喜劇、キケロ、ウェルギリウス、ラテン抒情詩・恋愛詩等、驚くべく広範なジャンルを覆っている。

先生がとりわけ情熱を傾けて来られたのはホメロス研究であるが、その成果は数々の秀れた論文と著書『ホメロスにおける伝統の継承と創造』(1988)において発表された。これは現存する『イリアス』『オデュッセイア』と失われた「叙事詩の環」の諸詩との関係を能うかぎりの論理的精密さで考察し、これらの詩に見られる詩的技巧を論じ尽くして余すところのない大著である。古代以来の伝統をもつホメロス学の成果を存分に汲み上げ、しかも創見にみちた、記念碑的な労作として内外での評価は高い。

先生の学問の国際的な評価は、数々の独文・英文の論文によって、また、昭和40年 4月より1カ年、同63年10月より1カ年、招聘されてマインツ大学客員教授を務められたことによっても裏づけられるが、先生はまたボナール『ギリシア文明史』3巻(人文書院)の翻訳や『ギリシア悲劇全集』(岩波書店)の

編集を通じて、西洋古典の読者の啓蒙にも意を注がれた。ご退官後はアリストテレス『詩学』（松本仁助先生と共訳）とホラティウス『詩論』（岩波文庫）の訳稿の刪定、今秋には論文集『ギリシア悲劇とラテン叙事詩』（仮題、岩波書店）の上梓、その後、ウェルギリウス『アエネイス』（京都大学学術出版会）の翻訳に取りかかれるご予定である。

京都大学において教育研究に、そして学内行政に心を尽くされること25年、「文学部の良心」と景慕される先生のお人柄は、フォーマニタースの学としての西洋古典学によって培われ、先生もまたこの学問を、われわれがそこに付くことを誇りとしうるものにして下さった。『西洋古典論集』XIは京都大学文学部において岡道男先生の講筵に列した学生たちによる論文集である。これだけの人数をもってしてなお、先生のご研究の広さと深さに達し得ぬことを慙じつつ、渝らぬご指導を庶幾う意をこめて、本書を先生に献呈したいと思う。

本号の編集にあたり、編集委員でもある松本仁助先生から『若い頃の岡道男さん』の一文をお寄せいただいたことにまず感謝しなければならない。岡道男先生の良き師友のこと、そしてマインツにおける師との出会いの経緯を伺って肅然とするのは筆者だけではあるまい。田中博明氏は先生の京都大学における最初の授業、プラトン『エウテュプロン』の受講者であり、『ギリシア悲劇全集』や今秋刊行予定の論文集の編集者であるが、今回、トゥキュディデスについての論考を投じて下さった。本号の編集作業は山下太郎氏の労に負うところが最も大きく、パソコン入力では伊藤朱美さんと岩谷智氏に、英文校正では根本英世氏にもご協力いただいた。そして、献呈論文集としては奇妙なことだが、本号作成のために岡道男先生より過分のご援助を賜ったことを付記しておきたい。

平成 6年 3月 中 務 哲 郎 識